

研究業績以外のその他の論文など

159 船越裕紀. 2022. 急潮と定置網の被害. 「里海フィールド科学—京都の海に学ぶ人と自然の絆—」(山下洋, 益田玲爾, 甲斐嘉晃, 鈴木啓太, 高橋宏司, 邊見由美編著). 28pp. 京都大学学術出版会, 京都.

160 谷本尚史. 2022. 海の京都の漁業—持続的な資源管理・商品開発・人材育成—. 「里海フィールド科学—京都の海に学ぶ人と自然の絆—」(山下洋, 益田玲爾, 甲斐嘉晃, 鈴木啓太, 高橋宏司, 邊見由美編著). 278-290. 京都大学学術出版会, 京都.

161 谷本尚史. 2022. 「丹後とり貝」—初夏を彩る極上の味覚. 「里海フィールド科学—京都の海に学ぶ人と自然の絆—」(山下洋, 益田玲爾, 甲斐嘉晃, 鈴木啓太, 高橋宏司, 邊見由美編著). 291pp. 京都大学学術出版会, 京都.

研究報告掲載報文要旨

京都府沖合海域におけるカニ籠試験操業と底びき網漁業による雄ズワイガニ CPUE の関係

丸山 香野子, 山崎 淳, 熊木 豊

京都府沖合において、2006～2021年のカニ漁期前にカニ籠試験操業を実施し、カニ籠による通常脱皮雄および最終脱皮雄のCPUEと同年の底びき網漁業によるモモガニおよびタテガニのCPUEとの関係を調べた。その結果、通常脱皮雄とモモガニにおいて有意な正の相関関係がみられた。これによりカニ籠試験操業からモモガニの出現状況を予測できることが示された。一方、最終脱皮雄とタテガニでは有意な相関関係は認められなかった。通常脱皮雄と最終脱皮雄の甲幅-体重関係には有意差がみられた。

高水温がトリガイの濾水速度に及ぼす影響（短報）

谷本 尚史

トリガイの濾水速度に及ぼす水温の影響を明らかにするため、平均殻長47.5mmのトリガイ5個体を用い、水温19、22、25および28℃における濾水速度を調べた。本種の水温と濾水速度の関係を回帰分析によりモデル化した結果、濾水速度は19℃から23℃付近まで水温の上昇とともに上昇し、それ以上の水温になると低下していくと予測された。特に本種の夏季経験水温に近い28℃における濾水速度は著しく低下することから、夏季の本種の成長および生残の低下に深く関与している可能性がある。

阿蘇海における *Chattonella marina* 赤潮の初報告（資料）

船越 裕紀, 尾崎 仁, 田中 雅幸

京都府の阿蘇海において有害赤潮と思われる現象が発生し、同時期に発生海域の近隣で畜養されている魚類の死亡が確認された。調査の結果、赤潮は有害赤潮プランクトンである *Chattonella marina* によるものであることが判明した。阿蘇海における本種の高密度での発生は初めてのことであり、阿蘇海は極めて閉鎖的であることから、本種の生活環は湾内で完結していると考えられ、今後も環境条件により発生する可能性が高いと推察された。

リアルタイム操業日誌アプリを用いた定置網へのクロマグロの入網状況の把握（資料）

野口 俊輔, 木下 直樹, 船越 裕紀, 岩尾 敦志

定置網におけるクロマグロの資源管理を進めるには、いつどのくらい入網し、漁獲あるいは放流しているかという実態を把握することが重要であるため、リアルタイム操業日誌アプリを開発しクロマグロの入網状況の把握を行った。令和3管理年度の情報を取りまとめた結果、小型魚では約737トン、大型魚では約134トンの入網があり、それぞれ同年に本府に配分されたTACの約10.8倍及び約3.2倍であった。また、管理開始前と比較したところ、入網量や時期に変化が見られた。引き続き、本アプリにより操業時のデータ収集を行うことで、漁獲枠の増枠や効率的な管理手法を検討するための情報として活用されることが期待される。